
魔法戦隊マジレンジャーVS爆竜戦隊アバレンジャー～荒ぶる勇気を魔法に変えて～

凜九郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦隊マジレンジャーVS爆竜戦隊アバレンジャー〜荒ぶる勇氣を魔法に変えて〜

【Nコード】

N4308Z

【作者名】

凜九郎

【あらすじ】

時は、2003年
アバレンジャーは、デズモゾーリヤとの最終決戦を目前にしていた。そんな中、創造の使徒ミケラはある計画を思い付く……。

一方、マジレンジャーの周りには、メメの鏡に映らない悪事が頻発していた……。

魔法と爆竜

2つの力が混じり合う時、何が起こるのか！？

駄文ではありますが読んで戴けたら幸いです。

（時間列で言うともマジレンジャーは、25話と26話の間、アバレンジャーは、42話から45話の間です。）

第一話　アバレ計画始動！

「困ったんだな。まさか不滅が殺られるとは思わなかったんだな・・」

「アバレンジャーめ、邪魔ばかりしおって」

地球と瓜二つの世界「ダイノアース」そこを拠点としている異星人「エヴォリアン」の要塞「侵略の園」から二体の異形の声が響く。一人は、緑色の顔と「だなあ」口調が特徴の創造の使徒ミケラ。もう一人は、ミケラより少し小太りで赤い目が特徴の無限の使徒ヴオッフアである。

「それで、どうする？」

「うーん、あつそうだ！お前のギガノイドを使うんだなあ」

ミケラがしばらく考えてからアイデアをひねり出す。

ちなみに、ギガノイドとはヴオッフアが造り出す大型怪人の事だ。また、ミケラもトリノイドと呼ばれる人と等身大サイズの怪人を造り出す。命の実を怪人内に入れる事で、巨大化する事も出来るのだ。

「でも、ギガノイドなんか使ってどうするつもりだ？」

ヴオッフアのポカーンとした表情を尻目にミケラは、自信満々に答えた。

「お前が前に作った ギガノイド「時計」でアバレンジャー共を未来に飛ばしてやるんだなあ」

「そうか！この前は過去に飛ばしたから上手くいかなかったが、未来ならきつと上手くいく！」

「そうだろう？その間にドラゴンドランの計画を進めるんだなあ」

「凄いぞ！ミケラ！」

「だろう。フフフ」

「そうだなミケラ。グフフフ」

騒ぎを聞いて近くに居た白い装束の美女が話に加わる。

美女はリジェエルと言ってギガノイドや、トリノイドをキスによって、アナザーアースである地球に送り込む仕事を担っている。ちなみに、恋にはとても一途である。

「何を笑っているのだ？ミケラ。ヴォツファ」

美女は、その外見からは想像出来ない低く野太い声を発した。それもそのはず、リジェエルの中には、邪命神デズモゾーリヤが宿っているのだ。デズモゾーリヤの肉体復活こそがエヴォリアンの目的なのだ。

その声を聞き二人が慌てふためいた。

『で・デズモゾーリヤ様！！？』

「我が肉体が復活していないというのに笑っていられるとは、役立ずの癖に呑気なものだな。この愚か者！」

バリバリバリ！？

デズモゾーリヤと呼ばれた美女は、手から淡い緑色の電撃を放つ。

「ぎゃーっ！違います。デズモゾーリヤ様の肉体を復活させる作戦を立てていたのです」

「ほう。それはどう言う作戦だ？」

デズモゾーリヤは、二人の話に興味を持ったのか電撃を止めた。それに安心したミケラは、ほっとした表情で作戦の顛末を話始めた。

「なるほど。面白い。直ぐに実行しろ」

満足そうに頷くとデズモゾーリヤは、役立ずの幹部に指示を出した。

『了解！』

そう言う二人は、作戦の下準備を開始した。

東京のとある町　紫蘇町　（しそちょう）
そこにカレーが旨いと評判な喫茶店「恐竜や」がある。

一見普通の喫茶店だが、その実体はダイノアースと呼ばれる異世界からの侵略者エヴォリアンから地球を守る爆竜戦隊アバレンジャーの秘密基地兼バイト先である。

ちなみに、爆竜とはダイノアースに生息していた恐竜が進化したもので、アバレンジャーの大切な仲間である。

中でもティラノサウルス・トリケラトプス・プテラノドン・ブラキオサウルスの四匹の爆竜は、かけがえのない相棒である。

アバレンジャーのメンバーは、普段から敬語を喋り寛大な心を持つが、親代わりで育ててある姪の伯亜舞に少し親バカの節がある アバレット はくありようが こと伯亜凌駕

クールだが根は優しい年収数億円の凄腕整体士である アバレブルー さんじょうゆきと こと三条幸人

機械弄りが大好きで、怒ると博多弁を話す元アイドルの アバレイエロー こと樹らんる (いつきらんる)

ダイノアースの竜人と言う種族に属し、地球にやって来て上記の三人に「ダイノプレス」を与え、自らも アバレブラック として戦うアスカ

ちなみに彼は、「ビクマナーを蹴る」をサッカーボールを蹴るような事だと勘違いしたりする天然ボケな一面もある。

話を戻そう。今の時刻は午後0時、恐竜やが一番忙しくなる時間帯だ。

「幸人さん。恐竜カレー入りましたよ」

ブラキオサウルスがプリントされた黒いジャケットを着たアスカが、トリケラトプスがプリントされた青いジャケットを着た幸人に注文

を伝える。

「分かった。すぐ作る。ところで、今中はどうした？姿を見てないが。」

今中とは、恐竜やでバイトをしている、赤縁眼鏡で二つ縛りの女子高生 いまなかえみり 今中笑里の事である。

ちなみに彼女は、アバレンジャーの名付け親でもある。

「えみぽんなら、学校の補習があるから顔出せないって、昨日言ってたわよ」

プテラノドンがプリントされた黄色いジャケットを着たらんるは、幸人の疑問に答えた。

「ちっ、忙しい時に限って来ないとはな」

幸人は、毒づきながらカレーを盛り付ける。
その手つきはアスカにはいささか乱暴に映った。

「まあまあ、幸人君。それくらいにしたらどうですか？ 凌駕君も舞ちゃんを迎えに行ってしまうましたし、ここは私たちだけで頑張りましょう。大丈夫。1時を過ぎれば峠は越えますから」

茶色い割烹着を着た白髪の老人で、恐竜やの店主 杉下竜ノ介 すぎしたりゅうのすけ 通称 スケさんが幸人を優しくたしなめる。

「杉下さんの言う通りよ。3人でやるしかないわ！」

らんるは、周りを鼓舞するように元気良く胸を張った。

「らんるちゃん？ワニは仲間外れですか？」

お座敷からワニの異形がひょっこりと頭を覗かせる。

ヤッデンワニ

それが異形の名前だ。元々は、トリノイドだったが、らんるに一目惚れしてしまう等の紆余曲折を経て、今は恐竜やで凌駕達と一緒に暮らしている。

「あんたは、人間じゃないでしょ！！？」

らんるは、ヤッデンワニに向かって台拭きを投げつける。

「あ痛。らんるちゃん。もっとやって？」

ヤッデンワニのマゾステックな声が響く。

それを聞いた店の常連客 横田は、手であっち行けシッシの仕草をしながら

「うるせえなあ。カレーがゆっくり食べねえだろ」

と吐き捨てた。

その言葉が効いたのかヤッデンワニは静かになった。

「それはそうと、らんる。後でアスカに謝っておけよ。アスカがへこんでるぞ」

らんるが後ろを向くと、アスカがカウンター左端の席でいじけてい

る。

負のオーラが出ているのが一目で解った。

「何で？私アスカさんに何も悪い事してないわよ？」

らんるは、戸惑いながら幸人に弁解する。

すると、幸人は深いため息を吐き、呆れた視線をらんるに送りながら言った。

「お前、さつき『3人で頑張りましょう』って言っただろ？
それで、アスカは自分が人数に数えられてないと思つてへこんでるんだ」

「ああ、その事ね。私が言つた3人は私・アスカさん・杉下さんの事よ。

だつて幸人さん愚痴つてばかりで仕事してないだから。
カウントしないのは当たり前じゃない」

らんるは、幸人にやられた時と同じ位冷たい視線を送りながら言つた。

「な・・・何だと・・・。らんるゝ！！؟؟？」

幸人の怒鳴り声は恐竜やを通り越し、近くの民家にまで響いた。
それが原因でその家の子供が大声で泣いた。

たとえば幸人の怒りがどれだけのものか理解してもらえらるだろう。

結局、アスカが立ち直り、幸人が怒りを静めるまでに20分もかかり、全てが終わった頃には時計は1時を回り、客足も落ち着いて

いた。

「なるほど、俺が居ない間にそんな事があつたんですか。それは災難だったね。らんるちゃん」

事の顛末を聞いたティラノサウルスがプリントされた赤いジャケットを着た凌駕が感想を述べる。

「凌駕！お前までそんな事を！」

「まあまあ、幸人さん落ち着きましょうよ」

幸人が、また怒り始めたのでアスカが慌てて宥める。その様子を見てらんるが話題を変えた。

「ところで凌駕さんって、あまり人を怒りませんよね？」

「そう言われれば、私も凌駕さんが怒っている所、あまり見た事ないですね。」

アスカの話聞いた舞は、穏やかな口調で反論した。

「そんな事ないよ。この前だって、舞がお弁当のしいたけ残した時、凌ちゃん怒ったもん！」

けど、もう仲直りしたもんね。ねー凌ちゃん？」

「ねー舞ちゃん？」

仲良く相づちを打つ2人を見てアスカは目をキラキラさせ、凌駕の手をがっしり握りながら言った。

「そうなんですか。やっぱり家族って良いですね」

「ええ！良いですよ家族って！」

凌駕がにこやかに笑いながらアスカの手を握った。

「なんか・・・話がズレた気がするんだけど・・・。」

小さな声でらんるが呟く。

それを聞き取った竜之介がらんるに微笑みながら言った。

「アスカ君は、答えに満足しているですからまあ、良いじゃないですか」

「それもそうですね」

らんるは、納得顔で頷いた。

そんな中、幸人は相変わらず凌駕の怒りについて考えていた。
（凌駕は今までに何度か他人が傷付いたりした時に、キレている。
そして、その都度相手を圧倒している・・・。もしかしたら、あいつは誰かを傷つけさせないために戦っているのかもな。）

「幸人さん。どうしたんですか？」

「うわっ！」

思案の途中に凌駕に話し掛けられ幸人は、思わず大声を出してしまった。

「なに考えてるんです？」

・・・あつ、さてはえみぽんの事考えてたでしょ！」

「そんな訳あるか!？」

幸人が凌駕に向かって吠えた・・・その時

ウィーンウィーン？

店内にアラーム音が鳴り響く。

「次元の扉反応よ!・・・これは、ギガノイドだわ！」

「よし、行くぞ！」

「凌ちゃん頑張つて来てね。」

「舞ちゃんもお行儀良くしてるんだよ。じゃあ行つてきます!？」

4人は、恐竜やを飛び出しギガノイドの元へと急いだ。

ここで場所を侵略の園に移し、時間を少し巻き戻してみよう。

「出来たぞ！ギガノイド第三番 時計・第2楽章 だ！」ヴォツファの歓喜の叫びが木霊する。その隣にいるミケラも喜びの声を上げた。

「私も新しいトリノイドができたんだなあ。キクとクラゲとゲームで キクラゲーム
たちはな
それと、橘の樹と鎌とイタチで カマイタチバナ なんだなあ」

「おおっ！コイツら強そうだな」

ヴォツファが出来立てのトリノイドに感嘆の声を上げる。

「ふふふ、自信作なんだなあ」

ヴォツファには、そう言ったミケラの鼻が少し伸びている様に思えたが気のせいだった。

「2人共何をそんなにはしゃいでいるのだ」

その声に振り向くと、赤い服を身に纏っている大人っぽい女性が怪訝そうに見詰めている。

彼女の名は、ジャンヌ。

その正体はアスカの恋人マホロである。元々、デズモゾーリヤに洗脳されていたが凌駕達によって洗脳を解かれ今は、恐竜やに情報を

流すスパイとして危険な任に就いている。

「ジャンヌか。実はな、これは大事な作戦なのだ!!」

ヴォツファが鼻息を荒くしてジャンヌに語りかける。

「作戦？」

その言葉を聞いて、ジャンヌはますます怪訝そうな顔をした。理由は簡単。2人の作戦が成功した試しがないからだ。

ジャンヌは、その作戦を半信半疑で聞き始めた。

しかし、作戦を聞くにつれて顔が徐々に強張っていき、全てを聞き終わる頃には、恐怖が彼女の表情を支配していた。そして、ある思いに駆られた。

（この2人なんと言う事を・・・なんとかしなければ・・・。しかし、電話やメッセージを送るとミケラ達に裏切りがバレてしまう。くっ私には何も出来ないのか・・・）

「ジャンヌどうした？顔色が悪いぞ」

「いや、何でもない。ただお前達も役に立つ時があるとはな」

ジャンヌは、ヴォツファに心境を悟られまいと必死に無愛想な表情をして見せた。

「それは、失礼という奴なんだなあ。私達だってやる時はやるんだなあ。なあヴォツファ？」

「なあゝミケラ？」

2人は、ジャンヌの心境など知るよしも無く、仲良く相づちをうつた。

しかし、その相づちは、伯亜親子には遠く及ばないものだった。その時、

バリバリバリバリ??!

不意にミケラとヴォツファの後ろから淡い緑色の電撃が飛んできた。動作の主は、もちろんデズモゾーリヤだった。

「下らん事をしている暇があるなら、早くトリノイドを未来に送り込め!!?」

「了解しましたデズモゾーリヤ様?」

デズモゾーリヤの余りの剣幕に2人は慌てて、トリノイドを未来に送り込んだのだった。未

送り込み終わってからしばらくして、ミケラがヴォツファに尋ねた。

「ところで、トリノイドをいつの時代に送り込んだんだ?」

「・・・2005年だ。」

ヴォッフアがぼそつと独り言の様に呟く。それを聞いたミケラは、驚いて思わず声が大きくなった。

「なにに？2005年？それは、物凄く近い未来なんだなあ」

「だって、デズモゾーリヤ様が急かすから・・・」

「まあ、過ぎた事を言っても始まらないんだなあ」予定通りではないが、作戦を始めるとするか」

ミケラの不気味な笑みと共に作戦は、開始された。

ついに、ミケラ達の作戦が始まるテラ！これから一体どうなるんだテラ？

次回をお楽しみにテラ！！

第一話〜アバレ計画始動！〜（後書き）

蒔人「なんか物凄く中途半端な終わり方してないか？」

魁「そんな事より、マジレンジャーVSアバレンジャーなのにどうして俺達の出番がないんだよー！！」

壬琴「ふっ、俺の出番も無い。イラつくぜ」

麗「大丈夫よ魁。今回は、私達にも出番があるわ！・・・えっ、マジレンジャーのメンバーは、次回も出番なし？・・・ちよつと作者殴ってくる！？」

蒔人・魁「やめろー！？」

という訳であとがきです。

お楽しみ戴けたでしょうか？

改めて小説を書くのは難しいと感じた今日この頃です。けれど、自分流で頑張っていきたいと思っています。

これからもよろしく願いいたします。 m (_ _) m

読んで戴いてありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4308z/>

魔法戦隊マジレンジャーVS爆竜戦隊アバレンジャー～荒ぶる勇気を魔法に変

2011年12月17日19時53分発行